

『空華集』 訳注

— 七言絶句部 (三) —

(二〇二二年九月一日受付・二〇二二年一〇月八日受理)

(国語教育講座) 太田 亨

『空華集』は義堂周信(一三二五〜一三八八)が残した作品集である。本稿では、その七言絶句部に所収される作品11〜15番目の訳注を試みる。

五山版『空華集』を底本に用い、元禄九年版『空華集』・五山文学全集本を校勘に用いる。押韻については、平水韻に従う。

11 因看鴉浴戲作 鴉からすの浴ゆあみするを看みるに因よりて戲たはむれに作なす

看み爾なんぢ老ろう鴉あ頻しき浴ゆ池いけ 爾なんぢ老ろう鴉あの頻しきりに池いけに浴ゆするを看みる
要ま同どう鴉あ白しろ也なり難がた爲なり 鴉からすの白しろきに同どうせんと要ますとも也なりた為なりり難がたし
不な如ごと仍なほ舊ふる黔くろ而なり黒くろ 如ごとかず 旧ふるきに仍なほりて黔くろめんとして黒くろきに
免まぬ使が羣ぐん禽きん特とく地ち疑うたが 群ぐん禽きんをして特とく地に疑うたがはしむることを免まぬが

*韻字は、上平声四支「池・爲・疑」

題意 カラスが体を洗うのを見たことよって、戯れに作った詩。カラスが湯浴みすることは、金鳥(三本足のカラス)のいる太陽が湯浴みする故事を意識したものか。『山海経』海外東経に、「湯谷上有扶桑、十日所浴」(湯谷の上に扶桑有り、十日の浴する所なり)と、湯谷には十個の太陽が水浴びをする場所

があるという。郭璞の注によれば、十個の太陽が一緒に出た時、草木が焼けて枯れてしまったため、堯が羿に十個の太陽を射させたところ、そのうち九個に命中させ、「日中鳥尽死」(日中の鳥尽く死す)と、太陽の中にいるカラスが死んだという。義堂が『山海経』を読んでいたことは、『日工集』康暦二年九月十日の条に見える。「戲作」は、面白半分に詠じること。

現代語訳 カラスのお前が池に入って体を洗っているのを見た。クグイの白さと同じように白くなりたいと思っても、やはりそれはなれそうにない。もとのように黒くなるうとして真つ黒になったにすぎず、周りの多くの鳥たちに特に怪しませるようなことにはならないのだ。

語釈

【看】よく見る、熟視する。

【爾】なんじ、あなた、お前。ここでは老鴉を指す。高適「人日寄杜二拾遺」

(『集千家注批点杜工部詩集』巻二〇「追酬故高蜀州人日見寄」の附録)に、「愧爾東西南北人」(愧づ 爾東西南北の人)とある。

【老鴉】カラス。「老」は接頭辞。蘇軾「鴉種麥行」(『王状元集註分類東坡先生詩』巻二四)に、「霜林老鴉閑無用、畦東拾麥畦西種」(霜林の老鴉 閑にし

て用無し、畦東に麦を拾ひ 畦西には種ゆ」と、カラスの種まきをユーモアたつぷりに詠じる。義堂が感化された中巖圓月は、「鴉偷燭」(『東海一漚集』)において、「坡詩昔作鴉種麥、今見偷燭鴉入宅」(坡詩に昔鴉麦を種うと作す、今燭を偷まんとする鴉の宅に入るを見る)と、蘇軾の詩に触発されてカラスに関心を抱き、家に入って灯火を消すカラスを取り上げ、末二句で「半宵闇坐莫嫌黒。老鴉終身黒似墨」(半宵闇に坐して黒きを嫌ふ莫し、老鴉は終身黒くして墨の似し)と、真つ暗闇になつても自分が元々黒いため平気であることを詠じる。

【頻浴池】しきりに池に入つて体を洗う。

【要同鴝白】クグイの白さと同じようになろうとする。「要」は、くになろうとする。同様の表現として、七律²³⁸「和頻字韻與諦叔眞」にも「要成大器休嫌晚」(大器に成らんと要すれども晩を嫌ふことを休めよ)とある。「鴝」は、クグイ。クグイの白さとカラスの黒さは対比されることが多く、『首楞嚴經』二には、「現前種種松直棘曲、鴝白烏玄、皆了元由」(現前の種種の松は直く棘は曲り、鴝は白く烏は玄く、皆元由に了る)とあり、もののありのままの姿を強調する際に用いられる。また『禪林類聚』二には、「地藏恩云、松直棘曲、烏玄鴝白。末後商量、空中一劃」(地藏恩に云ふ、松は直く棘は曲り、烏は玄く鴝は白し。最後に商量するに、空中の一面たり)とあり、差別の相が歴然として明白であることを強調する際にも用いられる。了庵清欲の「次韻答天章用眞文明天民、時約之天民皆避難於此」(『重刊貞和集』七「酬答」)に、「倒却門前刹竿著、従他鴝白與烏玄」(門前の刹竿を倒却して著し、鴝の白きと烏の玄きとを従他す)とある。

【也】くもまた。口語的表現。

【難爲】成りがたい、なれそうもない。ここでは、クグイの白さになれそうもないことを言う。差別の相が明確である同様の表現として、無準の「四睡」(『新

撰貞和集』上「讚仏祖」・『重刊貞和集』二「讚」)に、「悪者難爲善、善者難爲悪」(悪は善に爲り難く、善は悪に爲り難し)とある。

【不如仍舊黔而黒】元通りに黒くならうとして真つ黒にすぎない。「不如」は、くには及ばない、くにすぎない。「仍舊」は、以前のままであること、依然として、やはり、もともとおり。「黔」は、黒くなる。『莊子』天運第十四に、「夫鴝不日浴而白、烏不日黔而黒。黒白之朴、不足以為辯」(夫れ鴝は日びに浴せざるも白く、烏は日びに黔せざるも黒し。黒白の朴は、以て弁を爲すに足らず)とあり、クグイが毎日水浴びをして体を洗っているわけではないが真つ白であり、カラスが毎日体を黒く塗っているわけではないが真つ黒であることを言う。清原宣賢の『莊子抄』には、「鴝ハ白ク、烏ハ黒ハ、自然ノ生レツキ也。鴝ハ毎日水ヲアヒ子トモ白シ。烏ハ毎日黔ク染子トモ黒シ。黒白一、黒白素朴ハ、自然ノスカタ也。トチカマシタル、トチカ劣ルト、弁別シテワクヘキニアラス」と抄する。

【免使羣禽特地疑】多くの動物に特に疑わせるようなことにはならない。もとのありのままの姿から変わることにはないと言うこと。「免」は、免れる、逃れる、関わらなくてすむ。「使」は、くさせる、の意。使役。「羣禽」は、多くの鳥。「特地」は、とくに。『五灯会元』卷第十七南岳下十三世上「秘書吳恂居士」における晦堂の言に「水中得火世還稀、看著令人特地疑」(水中に火を得ることとは世に還りて稀にして、看著すれば人をして特地に疑はしむ)とあり、口語的表現として屢々用いられる。

余適 「老鴉」と詠出するのは、蘇軾の「鴉種麥行」詩と中巖の「鴉偷燭」詩を意識しているためであろう。蘇軾はカラスが種をまくことを詠い、中巖はカラスが灯火を奪うことを詠い、義堂はカラスが体を洗うことを詠い、それぞれ作品にユーモアが溢れている。ただし、その中であつて、義堂の作品には中国古来の金烏(三本足のカラス)や『莊子』におけるカラスが意識されており、

世俗とは一線を画した意が秘められているように感じる。「戯作」とあるが、「鴉」を題材に取り上げ、カラスの特性を詠しながら、本来のありのままの姿を変えることができないという人間の本質を突いているのではあるまいか。

12 送華姪兼東玉泉師兄① 華姪を送りて兼ねて玉泉師兄に東す

朔風十日口如絨 朔風十日口絨の(ごとし)

搖舌開唇豈可堪 舌を揺かして唇を開くこと豈に堪ふべけんや

好在玉泉揮玉塵② 好在なりや玉泉玉塵を揮ひ

春風春雨説江南 春風春雨江南を説かん

*韻字は、下平声一五咸「絨」。下平声一三覃「堪・南」。覃韻と咸韻は通韻。

①「東」字、元禄版・全集本作「簡」。

②「塵」字、全集本作「塵」。

題意 春谷(實中)口華を見送るとともに、兄弟子の玉泉周皓に手紙を送る。

「華姪」は春谷(實中)口華をいう。夢窓派・義堂の弟弟子に法を嗣ぐ人物だったようである。「華姪」と呼称するのは、大慧宗杲(一〇八九―一六三)が応庵曇華のことを「華姪」と呼んだことに因む。圓悟克勤より法を嗣いだ大慧宗杲には、兄弟子の虎丘紹隆(一〇七七―一一三六)がおり、大慧は虎丘より法を嗣いだ応庵曇華(一一〇三―一一六三)のことを「華姪」と呼び、楊岐派に伝わる衣を受けたという(七絶890「華侍者行送偈并叙」)。この話を受け、「曇華」と「口華」が同じであることから、春谷(實中)口華を「華姪」と呼んでいる。春谷(實中)口華は、始め「春谷」と号したが、後に「實中」と号し、その字説を義堂に求めている(説046「與華姪更字説」)。本詩の際に、どちらの道号であったかは不明。七絶890には、義堂が晩年に建仁寺(東山)の常在

光院(鷲峰)に閑居しているところを實中口華が訪れ、實中が鎌倉の瑞泉寺に帰る際に偈を贈っている。その序に「呈似錦屏本師和尚一笑」(錦屏の本師和尚に呈似して一笑せしむ)とあり、偈の結句に「珍重屏山落髮師」(珍重す屏山の落髮の師)とあることから、時の瑞泉寺(山号・錦屏山)の住持を務めていた心岩周己が實中の本師(最初に得度を受けた師)であったと思われる。

「東」は手紙を送ること。「玉泉」は玉泉周皓。無学祖元―高峰顕日―夢窓疎石―玉泉。義堂の兄弟子にあたる。『延宝伝灯録』巻二四に「京兆臨川玉泉周皓禪師、參禪之暇、從義堂絶海錯綜風雅」(京兆臨川の玉泉周皓禪師、參禪の暇に、義堂・絶海に従ひて風雅を錯綜す)とあり、臨川寺に住し、義堂や絶海と文筆活動を嗜んだことが知られる。同箇所には、東陵永瑀が詠んだ「吞碧樓」偈頌に和した詩が掲げられている(『詩軸集成』(五山文学新集所収)にも「吞碧樓詩軸」として収められる)。詩文に長けていたらしく、絶海は「與金剛物先和尚書」(『蕉堅藁』)で、「如是大統默菴玉泉、博學瞻才、進而不已」(如是・大統・默菴・玉泉の如きは、博學瞻才なれば、進みて已まず)と、その豊かな才能を称賛している。また、至正八年(一三四八)、月江正印が仰山(江西省袁州宜春県にある甲刹太平興國禪寺)に掛搭していた玉泉周皓に与えた道号偈が残されていることから、渡元の経験を持つことが分かる。

實中が玉泉より法を嗣いだかは不明である。

現代語訳 寒い北風が十日も吹き、口は綴じ目のように開くことができない。

これでは唇を開けて舌を動かして喋ることがどうしてできようか。さて、元氣でおられるでしょうか、玉泉師兄、きつと玉の付いた払子を揮い、春の風や春の雨といった江南の地での出来事をお話なさっているのでしょうか。

語釈

【朔風】北風。冬に吹く寒い風。龍岩真の「冬日」(『新撰貞和集』上「節序」・『重刊貞和集』三「節序」)に、「朔風刮面雪漫天」(朔風面を刮り雪天に漫

る」とあり、竺無道の「参方」(『新撰貞和集』中「送行」・『重刊貞和集』六「送行」)に、「朔風吹雪舌頭強」(朔風吹雪舌頭強^{こほ}し)とある。冬の朔風があまりにも寒いため、顔は削り取られるように痛く、舌は強ばって動かないことが詠じられている。

【口如緘】口が綴じ目のように開かない。『重刊貞和集』十「雜類」に、栢堂南雅が「守口如瓶」(守口瓶の如し)と題した作品があり、南極巽の「新鐘」(『新撰貞和集』下「器用」・『重刊貞和集』八「法器」)に、「口不能緘為一声」(口緘づる能はず一声を為す)とある。

【搖舌】舌を動かす。言葉を口から出すこと。大慧宗杲の「雪竇明覺禪師」(『重刊貞和集』二「讚」)に、「太湖三萬六千項之渺茫、即師之口也。洞庭七十一二朶之巍峭、即師之舌也。不動口不搖舌、已說現說當說、無少無剩也」(太湖三萬六千項の渺茫は、即ち師の口なり。洞庭七十一二朶の巍峭は、即ち師の舌なり。口を動かさず舌を揺かさざれば、已說現說當說、少無く剩無し)とある。

【開唇】口を開ける。同じ表現として、龍湫周澤の「瓶紅梅」(『隨得集』)に、「無語笑開唇」(語無く笑ひて唇を開く)とある。

【豈可堪】どうして我慢できようか。『貞觀政要』「論誠信第十七」に、「此言豈可堪爲教令」(此の言豈に教令と爲すに堪ふべけんや)とある。因みに義堂は、『貞觀政要』を足利氏満に献じ(『日工集』応安五年二月十日条)、その書を講義している(同応安五年二月二六日条・応安七年十月二四日条)。

【好在】元気で暮らしているかどうか、あいさつの言葉。杜甫の「送蔡希魯都尉還隴右因寄高三十五書記」(『集千家注批点杜工部詩集』卷二)に、「因君問消息、好在阮元瑜」(君に因りて消息を問ふ、好在なりや阮元瑜)とあるのに対し、江西龍派は『杜詩統翠抄』において、「以阮比高適也。樵隱疏、如好在——。然在字、否字意也。問之辞也。安穩ナリヤ意也」と抄している。「在」字に「否」の意が含まれ、尋ねる言辞となっており、安穩かどうか、という意

だと解している。

【玉泉】ここでは玉泉周皓を指す。

【揮玉塵】「揮塵」は、塵尾で作った扨子を揮うこと。晋人が清談する時、常に塵尾を取って談話を助けたことから、談話を意味する。禅林では導師が談話して弟子を教導することを言う。「玉塵」は、美しい扨子。玉製の柄のついた扨子。「塵」は扨子の異名。塵は鹿の中で主となる大鹿のこと。群鹿が塵に従い、塵の尾の動きを見て行くところから、導師の持つ扨子の異名となった。浙翁如琰の「鄭通判見訪有作因次韻」(『新撰貞和集』中「尋訪」・『重刊貞和集』七「尋訪」)に、「塵尾不揮談底事」(塵尾揮はざれば底事^{そて}をか談ぜん)とある。また、天境靈致の「龍湫和尚住南禅山門疏」(『無規矩』坤)に、「玉塵一揮、座側皆逢佛世」(玉塵一たび揮へば、座側皆な佛世に逢ふ)とある。

【春風春雨】江南水郷の春の景色は絶景と称され、杜牧の「江南春」(『三体詩』所収)に、「千里鶯啼緑映紅、水村山郭酒旗風。南朝四百八十寺、多少樓台煙雨中」(千里鶯啼きて緑紅に映ず、水村山郭酒旗の風。南朝四百八十寺、多少の樓台煙雨の中)と、酒旗をはためかす春風と静かに降り続ける春雨が詠み込まれている。

【説江南】江南のことを語る。「江南」は、中国の長江以南の地域を指す。当時、日本の禅僧は渡元し、主に江南地方の禅林に身を寄せることが多かった。江南地方の禅宗に隆盛をもたらし、日本僧にもその法を嗣いだ者が多くいる中峰明本は「江南古仏」と呼ばれた。また、春の景色が美しいことで知られ、韋荘の「菩薩蛮」(『花間集』)には、「人人盡説江南好、遊人只合江南老」(人人尽く説く江南好しと、遊人只だ合に江南に老ゆべし)と詠まれるほどである。南宋時代末期から元時代初期に活躍した画僧・玉潤は、瀟湘八景を描き、自らが賛を付している。その八景詩の一つである「遠浦帆歸」詩には、「残照未收漁火動、老翁閑自説江南」(残照未だ収まらざるに漁火動く、老翁閑自に江南

を説く」と詠まれている。その抄（都立中央図書館加賀文庫蔵）に、「老翁ト云心ハ、漁火ノ下ニ、老翁ノアルカ、サテモ此以前、江南アタリノ面白カリタルコトハ、忘レカタキヨト云コトヲ、云尽而説タテイノヤウナゾ。又ハ老翁ハ、年ヨリタル漁人ヲ、老翁ト云タカゾ。其ナレバ、此漁翁ガ、火ヲ拳テ帰ラントスルカ、又江南ヘムケテ、舟ヲ推出シテ、江南ノ辺ニテ、魚ヲツランカ、此ママ帰ンカト、吾ト独云タ様ナル画ノテイ也。自ト云字ヲ以見レハ、漁人ノ、江南ヘ行カンカ、行マイカト、独自云ヤウニ見ヘタゾ。此画ノ模様ヲ不知程ニ、此様ノ義理ヲ、アケタゾ。画ニ人形ガ、一人ナラハ、老翁ト云ハ、即チ漁人デアラウゾ。又二人アラハ、老翁ハ漁火ヲ拳テ、動ク者ノ外ゾ。（中略）江南者、『三体詩』杜常之詩ニハ、増注ニ「江南ハ指蜀江之南」云云。又『三体詩』「江南ノ春」ト云題ニテ杜牧之作ノ増注ニハ、「指揚子江以南也」。江南ノ景ハ、詩人ガ誉タゾ。春秋ハ一入面白ゾ。去程ニ、「千里鶯啼緑映紅、水村山郭酒旗風、南朝四百八十寺、多少樓台煙雨中」ト作タゾ」とあり、別の抄（白杵市教育委員会蔵）に「マコトニアリアリトシタ、面白キ、景氣ソ。サテ釣ノ翁トモガ、江南ノ事ヲ話リテ居ソ。江南ハ、梅ノ名処、酒ノ名処、春ノ時分ハ、面白キ処ソ」とあり、江南の地が名所・絶景として知られており、日本僧が憧憬を抱いていたことが分かる。

余滴 前半では義堂が寒さのあまり、話すことすらままならない状態を嘆いているのに対し、後半では兄弟子の玉泉が健在で、中国（元）での経験を談じているであろうことを詠んでいる。義堂は、渡元して江南の地で活躍したい夢を持ちながらも、それに堪えうる身体でなかったため、志を果たすことができなかった（『日工集』康永元年の条）。渡元を果たし、無事に帰国した玉泉を喜ぶと同時に、彼地で得た知見を自らも聞きたい気持ちがあったのではなからうか。

13 黄梅西軒即事

黄梅西軒の即事

爲愛西山宜晚對

西山の宜しく晩に對すべきを愛するが爲に

開窓每坐向西簷①

窓を開きて毎に坐して西簷に向かふ

山奴不解愛山意

山奴山を愛する意を解せず

未到黃昏下却簾

未だ黃昏に到らざるに簾を下却す

*韻字は、下平声一四塩「簷・簾」

①「坐」字、全集本作「座」。

題意

黄梅院の西の軒端における出来事。「黄梅」は黄梅院のこと。夢窓疎石の塔所であり、円覚寺の境内の奥に立地する。山号は伝衣山。夢窓疎石は、觀応二年（一三五二）に死去し、臨川寺に葬られたが、文和三年（一三五四）には円覚寺内に塔所として黄梅院が造られた。院の名は、五祖弘忍（六八八―七六一）が住していた湖北省黄梅山から採る。『扶桑五山記』四・円覚寺諸塔の嵯峨派に、「黄梅院」項があり、「夢窓国師、卵塔曰香巖、書院曰一枝」（夢窓国師、卵塔を香巖と曰ひ、書院を一枝と曰ふ）とある。「西軒」は、西側の軒端。「即事」は、事に触れて、その場のことを題材として詩を作ること、その場の出来事、の意。

現代語訳

西の山は夕暮れ時に向き合うのがよいということを好んでいるので、いつも窓を開けて西の簷に向かって座禅する。使いの者は私が西の山を愛しているのを理解せず、まだ夕方方になっていないのに簾を降ろしてしまった。

語釈

【爲愛】好んでいるために。「愛」は、好む、愛める。同様の用法として、無学祖元の「題屏風海圖」（『新撰貞和集』下「図画」・『重刊貞和集』九「図画」）に、「爲愛扶桑水國清、烟霞爲屋水爲城」（扶桑水国の清きことを愛するが爲に、烟霞は屋と爲り 水は城と爲る）とある。義堂自身も七律533「和韻常在光和尚」

に、「爲愛林亭延美景、不嫌野饈欠兼珍」（林亭の美景を延ばすことを愛するが爲に、野饈の兼珍を欠くることを嫌はず）とある。

【西山宜晚對】西に聳える山は夕暮れ時に向き合うのが良い。「宜」は、よろしくべし、と読み、くするのが良い。杜甫「白帝城樓」（『集千家注批点杜工部詩集』卷一八）に「翠屏宜晚對、白谷會深遊」（翠屏宜しく晩に対すべく、白谷 会はず深く遊ばん）とある。義堂が夕暮れ時に山を眺めるのを好む根底には、陶淵明が「飲酒二十首其五」（『文選』卷三〇「雜詩」）に、「山氣日夕佳、飛鳥相与還」（山氣 日夕佳く、飛鳥 相与に還る）と詠う意が存するか。

【開窓】窓を開ける。同様の表現として、七律 363 「和三首奉答東谷禪師其三」においても、「舊隱風烟憶錦屏、開窓面面海山青」（旧隱の風烟 錦屏を憶ひ、窓を開くれば面面海山青し）と、窓を開けて景色を眺める場面を詠じている。

【每座】いつも座禅する。『日工集』応安元年（未確定）五月八日の条に、東の正統庵の長老（大喜法忻）に和し、大喜を称して「夜榻焚香每坐禅」（夜榻に香を焚き毎に坐禅す）と記している。時代は降るが、本詩承句の一連の動作と同様の行為を、景徐周麟が「畫軸」（『翰林葫蘆集』卷三）で、「雪擁千山無四隣、開窓獨坐向清晨」（雪千山を擁して四隣無く、窓を開けて独り坐し清晨に向かふ）と詠んでいる。

【西簷】西のひさし。白居易の「病假中南亭閒望」（『白氏長慶集』卷五）に、「西簷竹梢上、坐見太白山」（西簷 竹梢の上、坐して見る 太白山）とある。

【山奴】寺院に住む使いの者。「山」は寺院を意味する。義堂の七絶 23 「春雪口占戲隣庵僧」にも「急喚山奴緊著門」（急ぎ山奴を喚びて門を緊著す）とある。

【不解】分からない、知らない。同様の表現として、七絶 582 「扇面雪江獨釣」にも「漁翁不解催詩思、只愛江魚上釣絲」（漁翁は詩思を催すことを解せず、只だ愛す 江魚の釣絲に上ることを）とある。

【愛山意】山を愛する思い。袁幼之の「遊双林寺」（『中華若木詩』・『続錦繡段』所収）に、「林間聽得僧相語、未有詩人不愛山」（林間 聴き得たり 僧の相語るに、未だ詩人の山を愛せざること有らずと）とあるように、山を愛する行為は詩人にとって当然と言えよう。

【未到黄昏】まだ夕暮れ時にならないうちに。無学祖元（子元）の「章竺郷」（『新撰貞和集』中「送行」）に、「山深自是多狼虎、未到黄昏著閉門」（山は深く自是より狼虎多ければ、未だ黄昏に到らずして門を著閉す）とある。

【下却簾】簾を下ろしてしまった。「下簾」は、簾を下ろすこと。「却」は動詞の後について意味を強める。楊万里の「泊舟臨平」（『誠齋集』卷二九）に、「前窓向市下却簾、後窓臨水開却門」（前窓 市に向かへば 簾を下却し、後窓 水に臨めば 門を開却す）とある。

【余適】この詩は、前半句に西山を愛でる義堂自身の行為が描かれており、後半句に義堂の思いに気付かない使いの者の行為が描かれている。もうすぐ夕暮れ時が近づき、座禅をしながら西山を眺めるのを楽しみにしていたところ、西日が当たらないように気遣った使いの者が、簾を下ろしてしまい、西山が見えなくなってしまう。義堂の気持ちはいかがなものか。腹を立てることなく、詩をしたためたところに、義堂の優しさ・ユーモアが垣間見える。

14 黄梅花下分歳

黄梅花下の分歳

東隣西舍鬪豪奢

東隣 西舍 豪奢を鬪はしむ

冷淡那知別一家

冷淡 那ぞ知らん 別に一家なることを

兄弟不嫌風味少

兄弟 風味の少なきを嫌はず

夜深和雪嚼梅花

夜深くして雪に和して梅花を嚼む

*韻字は、下平声六麻「奢・家・花」

【題意】 黄梅院・夢窓疎石の塔墓における除夜での出来事。「黄梅塔」は、夢窓疎石の塔所、すなわち黄梅院を指す。「分歳」は、禅林で除夜のことをいう。旧年と新年とに年が分かれるとき、の意。年越しの夜に集まって宴を開く風習があった。『空華集』では、七絶108「壬寅除夕謝錦屏通叟分歳」・七絶784「和物先分歳韻」・五律060「壬寅分歳」・七律319「癸卯分歳自和前韻」において、「分歳」が詩題に用いられている。

【現代語訳】 東隣に住む連中と西の家に住む連中とが贅沢ぶりを競い合っている。あつさりしていることを良しとすることが、他の考えとして存在することを知っているのだろうか。我々兄弟は上品で美味しいものが少ないことを嫌うようなことはない。年越しの夜も更け、私は雪が降るのに合わせて梅の花を嚼む次第である。

【語釈】

【東隣西舍】 東の隣や西の家。『易经』下経「既濟」に、「東隣殺牛、不如西隣之禴祭、実受其福」（東隣の牛を殺すは、西隣の禴祭やくさいなれども実ありて其の福を受くるには如かず）とあり、東の家と西の家を比較し、東の家では牛を犠牲に供して盛大な祭りを行っているのに対し、西の家ではつつましいが心のこもった祭りをしており、西の家のほうが神の心になつて福を受けるといふ。柏舟宗趙講の古活字版『周易抄』には、「九五―、九五テ既濟ノ道カナリスマイテ、敵モナシ。弓矢ヲトラウテモナイソ。カカル時ニハ宗廟ヲ祭ソ。先祖ヲ祭テ福ヲ受ケウソ。東隣西隣ハ、正義ニモ註ニモミヘヌソ。東隣ハ殷ノ紂カ東ニイテ、牛ヲ殺シテ、コトナウ祭ラウヨリ、文王ノ西隣ニイテ、イクラモ儉素テ大根一本デ祭ラルル様ナハマシソ。イクラモ儉約ニ祭ラルルソ。ナニモ天ハ徳ヲコソウクレソ。文王ハ明徳テ祭ルソ。紂ハ徳カナイソ。コレハ文王ト殷紂チヤトハ、後生ノ儒者カラカウミタソ。禴トハ薄禴トテ、ウスイ祭ソ。儉約ニソツト祭ル

ソ」とある。虚飾よりも誠実が尊いことを述べており、義堂の考えに通じる。貫休の「春晚書山家屋壁二首」（『禅月集』巻二）に、「前村後壟桑柘深、東隣西舍無相侵」（前村 後壟 桑柘深く、東隣 西舍 相侵すこと無し）とある。

【鬻豪奢】 贅沢さを競う。「豪奢」は、非常に贅沢ぜいたくなこと。羅鄴の「牡丹」（『三体詩』）に、「落盡春紅始見花、花時比屋事豪奢」（春紅を落ち尽くして始めて花を見る、花の時 比屋 豪奢を事にす）とある。『三体詩素隠抄』には、「詩ノ意ハ、春三月ノ花ドモガ、皆落チ尽シテ後、四月ノ初メノ時分ニ、コノ花ヲ見タゾ。サテ、コノ花ノ時節ニハ、京都ノ人ハ、貴トナク賤トナク、ソレゾレノ家ニテ、花見ノ會ヲナシテ、豪放奢侈ナル體ヲナスゾ」とある。

【冷淡】 あつさりしている。起句の豪奢に反する意になる。龍岩真の「廬山閑居十首其七」（『新撰貞和集』中「閑居」・『重刊貞和集』七「山居」）に、「清虚冷淡道人家、尋傍山林度歳華」（清虚 冷淡 道人の家、尋ねて山林に傍ひて歳華を度る）とある。

【那知】 どうして理解できようか。「那」は、なんぞ、と読み、反語の助字。**【別一家】** 他の考えを持つ派。司馬遷は「太史公自序」（『史記』第七十）において、「序略、以拾遺補藝、成一家之言」（序略して、以て遺を拾ひ藝を補ひ、一家の言を成す）という。

【兄弟】 禅林における諸僧を指す。義堂は、『日工集』応安二年（一三六九）十月三日条に、「是日、余在石屏。義田・東谷諸公来話。話及叢林之弊。余曰、今時兄弟不依老宿。是以往々失節、不成器者有之。可慎矣」（是の日、余石屏に在り。義田・東谷諸公来り話す。話叢林の弊に及ぶ。余曰はく、今時の兄弟老宿に依らず。是を以て往々節を失ひ、器を成さざる者之有り。慎しむべし）と述べ、叢林の諸僧が師の戒めに従わず、節度がないことを嘆いている。

【風味】 上品な香りや味わい。義堂は、七絶321「山茶花二首其一」で「莫嫌冷淡無風味、辛苦開花自雪中」（冷淡にして風味無きことを嫌ふ莫かれ、辛苦し

て花を開くこと雪中よりすと、花の上品な香りについて詠じ、七律 319 「癸卯分歳自和前韻」で「淡薄雖云風味好、僮奴未必到頭甘」（淡薄 風味好しと云うと雖も、僮奴 未だ必ずしも到頭甘しとせず）と、分歳に食べる蜜柑の上品な味わいについて詠じる。

【夜深】夜が更ける。

【和雪嚼梅花】雪と一緒に梅の花を嚼む。『佩文韻府』韻府拾遺卷十の「嚼梅」に、「花史、鐵脚道人、常愛赤脚走雪中、興發則朗誦南華秋水篇、嚼梅花滿口、和雪嚼之曰、吾欲寒香沁入肺腑」（『花史』に、鐵脚道人、常に赤脚にて雪中を走るを愛し、興發すれば則ち南華秋水篇を朗誦し、梅花を嚼みて口に満たし、雪に和して之を嚼して曰ふ、吾寒香の肺腑に沁み入らんと欲す、と）とあり、義堂は、鉄脚道人が梅の花を嚼んで雪と一緒に食べた逸話を知っていたのであろう。『花史』を読んだ可能性も存する。本詩以外にも、七絶 189 「人日雪中謝悟峯居士至」に、「不厭菜羹淡無味、更教和雪嚼梅花」（菜羹の淡くして味無きを厭はず、更に雪に和して梅花を嚼ましめよ）と詠じている。

【余滴】「分歳」は、除夜を意味し、俗世において、年中の労を忘れ、息災を祝し合うため、年寄りから子供までが食事をして宴会する風習がある。叢林にあつては質素枯淡が求められるにも関わらず、世俗の影響を受け、今や近隣同士でその盛大さを競うようになっていく。叢林の俗化を嘆く義堂の思いが伝わってくる詩である。この詩に限らず、義堂は常に叢林の将来を考え、そのあり方について悩んでいる。

15 送恢上人爲黃梅幹事西謁幕府

恢上人の黃梅の幹事と為りて西のか
た幕府に謁するを送る

四月青梅半帶酸

四月 青梅 半ば酸を帯ぶ

霏霏細雨又黃昏

霏霏たる細雨 又黃昏

憑君爲報將軍道

君に憑りて爲に將軍に報じて道ふ

止渴先須護本根

渴きを止むることは先づ 須く本根を護すべしと

*韻字は、上平声一四寒「酸」。上平声一三元「昏・根」。元韻と寒韻は通韻。

題意

恢上人が黃梅院の世話役となつて西の幕府に面会するのを見送る。「恢上人」については、七絶 136、138 に「白雲不聞師有偈、贈恢侍者歸京、次韻兼簡西雲東陵東山別源二大老云三首」（白雲の不聞師偈有り、恢侍者が京に帰るを贈り、韻を次で兼ねて西雲の東陵・東山の別源の二大老に簡すと云ふ三首）とある「恢侍者」と同一人物か。円覚寺白雲庵の不聞契聞が詠んだ偈頌があり、恢侍者が京都に帰るのに詩を贈り、さらに韻を和して南禅寺西雲庵の東陵永瑛と建仁寺の別源圓旨にも手紙を言付けている。また、京都に帰った恢侍者は、南禅寺大雲庵に寓していたのであろう。雑著 003 「書宜晚軒」に、「大雲恢上人、寄紙求余命其所居之軒」（大雲の恢上人、紙を寄せて求余に其の居する所の軒に命ずることを求む）とある。黃梅院の世話役（幹事）となつていくことから、義堂の恢上人に対する信頼は篤かったと言えよう。

現代語訳

四月、まだ熟さない青くて堅い梅の実はかなり酸っぱい状態であり、夕暮れ時になると、細やかな雨がしきりに降ってくる。世話役のあなたを頼つて、幕府の將軍に伝え言うことは、喉の渴きを止めるには、まずその根本の欲求を大切に考えた方が良いですよ、ということだ。（いま青梅を聞いて喉の渴きが癒えたでしょう）

語釈

【青梅】まだよく熟さない、青くて硬い梅の実。龍泉令淬の「豆子」（『松山集』）には、「樹上青梅未帶酸」（樹上の青梅 未だ酸を帯びず）とある。

【半帶酸】かなり酸っぱい状態である。蘇軾の「贈惠山僧惠表」（『王状元集注

分類東坡先生詩』卷一五)に「客來茶罷空無有、廬橘楊梅尚帶酸」(客来りて茶罷り空しく有無し、廬橘楊梅尚ほ酸を帶ぶ)とあり、『四河入海』に引かれる江西龍派の抄に、「後講云、廬橘楊梅ハ、マダスウテ不食、夏初ナレハ也」とある。陸游の「梅花」(『劍南詩藁』卷四)にも、「結子青青亦帶酸」(結子青青として亦た酸を帶ぶ)とある。

【霏霏】雨が甚だしく降るさま。『詩経』小雅「采薇」に、「昔我往矣、楊柳依依。今我來思、雨雪霏霏」(昔我往きしとき、楊柳依依たり。今我來る、雨雪霏霏たり)とあり、清原宣賢講述の『毛詩抄』には、「昔出陣シタ薇ノ時分チヤ程ニ、楊柳力依々然トアツタカ、帰陣ノトキハ、ミソレノヤウナモノカフルヨ。霏霏然トアルソ」と抄されている。

【細雨】細やかな雨。杜甫の「梅雨」(『集千家注批点杜工部詩集』卷七)に「南京犀浦道、四月熟黃梅。湛湛長江去、冥冥細雨來」(南京犀浦の道、四月黃梅熟す。湛湛として長江去り、冥冥として細雨來る)とある。黃梅院に降る雨から杜詩が想起されたか。

【憑君】あなたに頼る、あなたに頼む。同様の表現として、蘇軾「贈虔州術士謝晉臣」(『王状元集注分類東坡先生詩』卷二四)に、「憑君爲算行年看、便數生時到死時」(君に憑りて為に行年を算して看よ、便ち生時を數へて死時に到る)とある。

【爲報】私のために伝える。杜甫「得房公池鵝」(『集千家注批点杜工部詩集』卷九)に、「鳳凰池上應回首、爲報籠隨王右軍」(鳳凰池上 応に首を回らすべし、為に報ぜよ 籠は王右軍に隨へり)とある。

【道】いう、のべる。同様の表現として、七律 535 「次韻贈信侍者東歸兼簡諸道友」に、「爲報家中兄弟道、歸期擬及早涼初」(為に家中の兄弟に報じて道ふ、歸期 早涼の初に及ばんと擬す)とある。

【止渴先須護本根】渴きを止めるには、まずその根源を大事にした方が良い。

「須」は、すべからくべし、と読み、ぜひする必要がある、の意。「護」は、護る、大切にする。「本根」は、おおもと、根本、本源。義堂は、『世説新語』仮譎に、「魏武行役失汲道、三軍皆渴。乃令曰、前有大海林。饒子甘酸、可以解渴。士卒聞之、口皆出水。乘此得及前源」(魏武行役して汲道を失ひ、三軍皆な渴す。乃ち令して曰はく、前に大いなる梅林有り。子饒くして甘酸なり。以て渴を解くべし、と。士卒之を聞き、口皆な水を出す。此に乗じて前源に及ぶことを得たり)とあり、魏の曹操が行軍していた際に、水のあり場が分からなくなり、皆のどが渴いたため、前方に大きな梅林があることを号令したところ、兵士は口の中につばを生じ、困難から脱出できた故事を意識する。喉の渴きを癒やすためには、水が飲みたいという欲求を大事にした方がよいであつて、困ったこと(喉の渴き)に対しては、その困ったことを脱したい欲求(本根)こそを大切に考えた方がよいと幕府に伝えている。義堂と幕府との間には、困った問題が共通の認識として存在しているようであるが、その具体的な問題は不明である。

余適 恢上人が黃梅院の取り纏め役となり、京の幕府に謁見することになる。義堂自身において、もしくは円覚寺黃梅院において、何か困ったことでも生じていたのだろうか。その困り事を解決したい欲求を満たすためには、幕府の力が必要だったのかもしれない。夢窓派の力を関東に強めるのが義堂の目的であつたが、関東在任期には、建長・円覚両寺の渡諷経問題等、様々な問題に直面し、解決することになる。本詩では、具体的な問題は分からないが、幕府を頼りにしていることから、個人では解決し得ないような問題が生じていたのであらう。一方で、詩中に「青梅」を詠み込むことで、詩を読めば、その場で喉の渴きが癒えることを想定している点も着目される。義堂の作詩における工夫・配慮と言えよう。